

## 積極的な生徒指導の在り方の授業指導

——広島女学院大学での道德教育と関連させた授業「生徒指導の研究」の事例——

戸田 浩暢

(2012年10月10日 受領)

Lesson Instruction on the Nature of Positively Instructing Students  
——Moral Education at Hiroshima Jogakuin University, and Cases of Related  
“Student Instruction Research” Lessons——

Hironobu TODA

### Abstract

This paper considers what forms of instruction would be good in university lessons for students to deepen their understanding of the nature of positive student instruction. Specifically, we took cases (the problem of bullying) that were related to morals education in discussions of “student instruction research” in lessons supervised by the author, and were able to deepen the students’ understanding of lessons by creating study instruction proposals during the time for morals.

### I は じ め に

生徒指導は学校の教育目標を達成する上で重要な機能を果たすものであるが、学習指導要領で示されるような教育課程に基づく指導と異なり、具体的な指導内容や目標、授業時数等が定められておらず、生徒指導の捉え方は多様である。高橋（2000）の調査<sup>(1)</sup>では、大学生に生徒指導のイメージをSD法で調べたところ、「暗い」、「陰険な」、「みじめ」、「恐ろしい」など、不快でマイナスのイメージを強く持っていることが明らかにされている。また、現職教師については、自由記述方式で回答を求めたところ、「生徒指導は、校内暴力等を予防するための活動である。」、「生徒指導は、生徒に校則を守らせるための指導である。」、「校内暴力等の問題行動が起こらなければ、生徒指導は必要ない。」などの記述が中心であった。

広島女学院大学で、稿者が担当する、「生徒指導の研究」（全学部・学科3年生：112名受講）の第一回（2012年4月13日金曜日Ⅰ・Ⅱ限）において、学生に生徒指導のイメージを聞いたと

ころ、上記の学生・現職教師と同様の回答であった。甚だしい回答には、「生徒指導は、非行を行う駄目な人間を、強制的に真人間に矯正していく学校教育活動である。」という記述も見られた。

学級・ホームルーム集団における児童・生徒が互いに相手を尊重したり、望ましい人間関係の成立を促し、児童・生徒一人一人の個性の伸長を図るような積極的な生徒指導（開発的生徒指導）の視点からの記述や、文部科学省が示した『生徒指導提要』（平成22年）の冒頭に書かれてある、「教育課程の内外において一人一人の児童生徒の健全な成長を促し、児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指す」<sup>1)</sup> ことに関する記述は全く見られなかった。

また、日々の生徒指導に関わる教育活動に関して聞いたところ、文部科学省が従前から示している、「児童生徒に自己存在感を与えること」、「共感的な人間関係を育成すること」、「自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助すること」の三点に関わる記述は一切見られなかった。そして、豊かな心をはぐくみ、人間としての生き方の自覚を促し、児童生徒の道徳性を育成することをねらいとする教育活動である道徳教育との関連性について述べたものは皆無であった。道徳教育で培われた道徳性や道徳的实践力を、生きる力として日常の生活場面に具現できるように援助することが生徒指導の働きであるが、このような視点を学生が意識していないことが明白になった。

このような学生の意識に対して授業指導を通じて改変していく必要性が求められている。では、どのような授業指導が望ましいのであろうか。次節以降、稿者が実際に行った授業に基づいて、積極的な生徒指導の在り方に関わる授業指導を考察したい。

## Ⅱ 生徒指導に関わる学生の体験から

前節で述べた、学生の生徒指導のイメージや日々の生徒指導に関わる教育活動に対する意識はどのようにして形成されたのであろうか。

稿者が担当する授業の「生徒指導の研究」の第一回において、学生が小学校から高等学校時代に掛け、生徒指導上のどのような問題行動を体験したり見てきたか、また、教師の指導はどのようなものであったのか、無記名でワークシートに記入させた。教師の指導は自由記述にしたが、問題行動に関するワークシートの欄は、①いじめ、②不登校、③暴力行為、④薬物（シンナー・覚醒剤・大麻等）、⑤性に関する問題行動、⑥万引き・窃盗、⑦その他、にした。

ワークシートの①と②に関しては、ほとんど全ての学生が記入をしていたが、③から⑦に関しては、空欄が目立った。

表1 学生が小学校から高等学校時代に掛けて体験したり見てきたいじめ

内 容	具 体 的 事 例	人数
無 視	仲間はずれ、無視の連鎖（リーダーの指示で日によって人が変わる）、返事や挨拶が返ってこない	56人
暴 言	ばい菌扱い、責める言葉（死ね、ウザい、馬鹿、阿呆、間抜け、臭い、キモい、デブ、チビ、地味、根暗、声が低い、出しゃばり、引っ込み思案、声が小さい、声が変わる、顔が変わる、体型が変わる、髪の毛が変わる、汚い）、冷やかす、からかい、呼び出して泣くまで言葉で責める、本人が嫌がるあだ名、悪口を書いた手紙が下駄箱に毎日入る	44人
隠 匿	くつ、リコーダー、下着（水泳の授業中）、体操服、机、椅子、鞆、スリッパ、体育館シューズ、筆箱、文房具、テスト用紙、教科書	32人
器物破損	教科書・ノートを破られる、教科書・ノートに落書き、体操服に絵の具・墨を付けられる、制服を破られる（カッターで切る）、筆箱を壊される	18人
暴力行為	肩を殴打、背中を蹴る、足を引っ掛ける、プロレスごっこ、ボール当て、髪の毛を引っ張る	12人
意 地 悪	机の移動、紙のボールを投げ付けられる、人が嫌がる物まね、何かするとくすくす笑われる、授業中に発言すると笑われる、ひそひそ話し	8人
ICT 機器	携帯電話のブログで悪口を書かれる、ネットで悪口を言う、毎日「死ね」というメールが来る、HP に悪口の掲載	6人
そ の 他	上靴に画鋲を入れる、チョークの粉を給食に入れる、体育の授業中にバスケットのパスがまわってこない、先生に対するいじめ（無視、指示を聞かない、暴言、暴力行為）、脅されてお金を取られる、万引きを強要される、公園・欄干に落書き、トイレに入っている時に上から水を掛けられる	11人

後で述べる授業実践に関わって、①の「いじめ」を詳細に見てみる。学生のあげた具体的事例をまとめたものが表1である。

表1では、「無視」、「暴言」、「隠匿」、「器物破損」、「暴力行為」、「意地悪」、「ICT 機器」、「その他」という項目で分類を行ったが、「無視」をあげる学生が56人と最も多く、続いて「暴言」が44人、「隠匿」が32人という結果であった。一般的によくみられるいじめの形態をほぼ全て網羅していることがわかり、「いじめはどの学校でも生起している」ことを裏付けている。

次の、②の「不登校」であるが、「クラスの二人の生徒が学校に来ない。」「転校してきた生徒が、暫くしたら学校に来なくなった。」「保健室登校をしている同級生がいた。」という記述が多く見られ、①の「いじめ」同様、ほとんど全ての学生が記入をしていた。

記述は、①の「いじめ」と②の「不登校」に比べると少ないが、③の「暴力行為」では、大きく器物破損と対人暴力の二つに分類できる。器物破損では、「窓ガラスを割る。椅子や教卓・机を階段・教室から落とす。消火器を教室で噴出する。水道を出しっぱなしにして廊下が水浸しになる。火災報知器を作動させる。」などがみられた。対人暴力は、対生徒と対教師の二つのケースが書かれており、「腹や背中を殴る。足を蹴る。机や椅子を投げる。」などがみられた。

学校の状態によって大きく左右すると思われるが、学級崩壊をして生徒や教師に対する暴力行為が日常的に見られたと記入する学生がいた。④の「薬物（シンナー・覚醒剤・大麻等）」は実際に見たケースは極めて少数で、「ハッパ（大麻）をしている人がいた。」という記述が一件あったが、その他は、「トイレで上級生がシンナーを吸っていたらしい。ガスパン遊びをしている人がいたらしい。他校で大麻を吸う人がいたらしい。六年前に学校が荒れた時代にシンナーが流行ったようだ。」と伝聞の形が多かった。⑤の「性に関する問題行動」の記述も少なく、「同級生が妊娠して学校を辞めた。」という記述が三件見られたが、多くは、「中学の時、同じ学年の女子が携帯の出会い系サイトを使って年上の男の人と援助交際をしているという話を聞いた。」など伝聞の形が多かった。「生徒が教師にセクハラをしていた。教師に抱きつかれ、触られた。」という記述もあった。⑥の「万引き・窃盗」は、③の「暴力行為」に次いで多く、「同級生が文房具を万引きしていた。コンビニでお菓子や化粧品を盗っていた。自転車を盗っていた。校内でお金を盗られた。」などという記述が見られた。中には、「小学校六年生の時にスーパーでよく万引きをしていた。その時はいかに上手く盗るかということを考え、罪悪感なかった。」という記述も見られた。⑦の「その他」では、「同級生の男子が集団で煙草を吸っていた。自転車で校舎内の廊下を走る。ロケット花火・爆竹を授業中に廊下から投げ入れる。飲酒する。外泊を繰り返す。」などの記述が見られた。

ワークシートの記述から、多くの学生が生徒指導上の様々な問題行動を体験したり見てきたことがわかる。

このような問題行動に対して、教師はどのような指導をしていたのか自由に記述させたところ、日々の教育活動で心を育てる視点からの記述はなく、「強権的な体育の先生が生徒を叱る指導を行っている。」「上から押さえつけて従わせる指導である。」「厳しい校則を設定して遵守させる指導をしている。」という記述がほとんどであった。矮小的でマイナスのイメージを生徒指導に対して持たざるを得ない現状があるのではないかと考えられる。

### Ⅲ 積極的な生徒指導の在り方

#### 1 積極的な生徒指導の在り方について

生徒指導については、小学校学習指導要領第1章「総則」の第4「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項 2(3)」では、「日ごろから学級経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め、生徒指導の充実を図ること。」<sup>2)</sup>とされている。同様に、中学校学習指導要領第1章「総則」では、「教師と生徒の信頼関係及び生徒相互の好ましい人間関係を育てるとともに生徒理解を深め、生徒が自主的に判断、

行動し積極的に自己を生かしていくことができるよう、生徒指導の充実を図ること。』<sup>3)</sup>とし、高等学校学習指導要領第1章「総則」の「第5款 教育課程の編成・実施に当たって配慮すべき事項」の「5 教育課程の実施等に当たって配慮すべき事項(3)」においても、同様の文言<sup>4)</sup>が記されている。そして、文部科学省が示した『生徒指導提要』(平成22年)では、「生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のことです。すなわち、生徒指導は、すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよき発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指しています。生徒指導は学校の教育目標を達成する上で重要な機能を果たすものであり、学習指導と並んで学校教育において重要な意義を持つものと言えます。』<sup>5)</sup>と述べられている。

生徒指導を通してはぐくまれていくべき資質や能力について、『生徒指導提要』(平成22年)では、「自発性・自主性」、「自律性」、「主体性」の三点をあげている<sup>6)</sup>。

一点目の「自発性・自主性」については、「他者の指示や意見に従ったり、あるいは他者の顔色や周りの様子をうかがったりして行動するのではなく、自らのうちにわき上がる思いや判断に基づいて行動すること」を「自発性」とし、「他者に依存することなく、他者に責任転嫁することなく、自らの考えと責任において行動すること」を「自主性」としている。

二点目の「自律性」については、「自分の欲求や衝動をそのまま表出したり行動に移したりするのではなく、必要に応じて抑えたり、計画的に行動することを促したりする資質」としている。

三点目の「主体性」については、「与えられたものであっても、自分なりに意味づけを行ったり、自分なりの工夫を加えたりすることで、単なる客体として受動的に行動するのではなく、主体として能動的に行動する」ことが求められているとしている。

## 2 積極的な生徒指導と道德教育について

生徒指導と道德教育は、相互に依存・補完し合った緊密な関係にある。しかし、両者の決定的な相違点は、生徒指導は、道德教育とは異なり、独立した領域ではないことにある。

道德教育は、小学校学習指導要領第1章「総則」の第1「教育課程編成の一般方針 2」で、「学校における道德教育は、道德の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道德の時間はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。』<sup>7)</sup>とされている。

生徒指導は機能概念であり、道德教育は領域概念である。生徒指導が、児童生徒一人一人の

日常的な生活場面における具体的な問題に対して指導する場面が多い一方で、道德教育は、児童生徒の道德的心情や判断力・実践意欲・態度などの道德性の醸成を直接的な目標にしている。

両者の性格は異なるが、児童生徒の日常生活における生徒指導が徹底すれば、児童生徒は望ましい生活態度を身に付けることになり、道德性を養うという道德教育のねらいを側面から支えることとなる。一方、道德教育において児童生徒の道德性が養われれば、児童生徒の日常生活における道德的実践が確かなものになり、自己実現に繋がって、生徒指導も充実するのである。両者とも「生きる力」の育成に関して大きな役割を担っており、「望ましい生き方」や「人間らしく生きる」ことについて探求し、実践化を求めることについて、全教育活動を通して行うことで共通性がある。

このため、生徒指導は、道德の授業に対する児童生徒の学習態度を育成したり、道德の授業への資料を提供したり、学級内の人間関係や環境を整備して望ましい道德の時間の雰囲気や醸成することに深く関わってきた。また、道德教育は、生徒指導をすすめる望ましい環境作りに寄与し、道德の授業を生徒指導に関連させ、道德の授業の展開に生徒指導の機会を提供してきた。

そして今まで、全国で、生徒指導と道德教育に関わる具体的な取組みが行われ、実践事例が公開もされてきた<sup>(2)</sup>。

生徒指導と道德教育の緊密な関係は明白であるが、道德教育を通してはぐくまれていくべき資質や能力について、中央教育審議会が答申した、『幼稚園、小学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について』（平成20年）では、「幼稚園においては規範意識の芽生えを培うこと、小学校においては生きる上で基盤となる道德的価値観の形成を図る指導を徹底するとともに自己の生き方についての指導を充実すること、中学校においては思春期の特徴を考慮し、社会とのかかわりを踏まえ、人間としての生き方を見つめさせる指導を充実すること、高等学校においては社会の一員としての自己の生き方を探求するなど人間としての在り方生き方についての自覚を一層深める指導を充実すること、にそれぞれ配慮する必要がある。」とし、「とりわけ、基本的な生活習慣や人としてしてはいけないことなど社会生活を送る上で人間としてもつべき最低限の規範意識、自他の生命の尊重、自分への信頼感や自信などの自尊感情や他者への思いやりなどの道德性を養うとともに、それらを基盤として、法やルールの意義やそれらを遵守することなどの意味を理解し、主体的に判断し、適切に行動できる人間を育てることが大切である。」としている<sup>(3)</sup>。

両者が児童生徒にはぐくむべき資質や能力には、「人間らしく生きる」ことを考えさせ、実践化を求める点に関して共通性がある。



#### Ⅳ 授業「生徒指導の研究」における指導事例

学生の生徒指導に対するイメージや意識の改変を行い、正しい認識を持たせるために、文部科学省の考え方の紹介や解説、稿者の体験（中学校に五年間、高等学校に九年間勤務）に基づいて、日常的な心の育成の重要性と積極的な生徒指導の在り方を中心に授業を行ってきた。

この項では、「いじめ」をテーマにした、第12回（7月6日）と第13回（7月13日）の授業内容をみていく。

##### 1 携帯電話など ICT 機器に係る指導について

第12回（7月6日）の授業では、いじめに関して、特に最近急速に広まっている、携帯電話など ICT 機器に係る指導について、最初、事例への対応を学生に書かせた。事例としてあげたものは、「昨今、情報化の進展にともない、インターネットや携帯等 ICT 機器などを使った新たないじめが発生している。各学校においては、家庭とも連携しながら、適切な使用について、指導の徹底を図ることが大切である。新たないじめに対する指導のポイントを簡潔に書け。」である。

今までの、学生の学びの成果として、『『いじめは人間として絶対に許されない。』との意識を、学校教育全体、特に日常的な道德教育を通じて、児童生徒に徹底する。』、「学校等における相談機能を充実し、教職員と児童生徒、児童生徒間の共感的な人間関係づくりに努め、児童生徒との絆を深める。』、「いじめは卑劣な行為であることを児童生徒の心に定着させるとともに、被害者の心の痛みが理解できる思いやりの心を育てる。』、「教職員が、『いじめがなぜいけないのか』を本気で自らの生き方や思いを重ねて語る等の教育的活動を、日常的に行う。」などの文言を、真っ先にあげることを期待したのだが、実際は多くの学生が次のことを記述した。

- インターネットや携帯等を使ったいじめが発覚した場合、すぐに学年主任等に連絡し、実態把握に努めるとともに、全学年の児童生徒にアンケート調査を行う。
- 保護者・児童生徒に ICT 機器のメリット・デメリットを伝える。
- 授業で、情報倫理ビデオなどの資料を児童生徒に見せ、情報の取り扱いやインターネットの利用などについて正しい知識を身に付けさせる。
- インターネットを使用する場合、個人情報や他人の噂、悪口は書かないよう、学校と家庭で指導を徹底する。
- 児童生徒が ICT 機器を使用できる範囲を、フィルタリング機能を用いて制限する。
- インターネットは匿名性が高いツールであるが、IP アドレスから個人特定が可能であることを周知し、予防活動を行う。
- 学級・ホームルームで、実際の事件について新聞記事を用いて扱い、指導を徹底する。

上記の指導は、大変大切なことではあるが、表面的な対応についての言及しており、いじ

めの指導の根本となる事柄への言及は、「いかなる状況であっても、人を傷付ける行為は絶対にしてはいけないと教える。」「道徳の時間で、インターネットでの新たないじめを取り上げ、話し合う。」の二名以外は皆無であった。いじめの問題への対応について、早期発見・早期対応や、いじめを許さない学校づくり、望ましい集団づくりの根幹をなす心の育成についての言及がなされておらず、今までの授業の学習が表面的な理解に留まり、深まっていないことが明らかとなった。

## 2 いじめの指導について

### (1) 授業の概要

第13回（7月13日）の授業では、前回の事例に対する学生の反応を反省し、より切実に積極的な生徒指導の在り方からいじめ問題を考察させるため、道徳の時間を用いた生徒の心の耕しを中心に、学習指導案を書かせた。

ここでは、次の資料<sup>9)</sup>を基に、中学校二年生を想定して考えさせた。

#### 「ひとりぼっち」

生徒手記

- ①中学生がいじめを苦にして自殺したというニュースが時々報道される。そんな時Aは僕に、「おい、おまえは死んでもいいけど遺書に俺の名前を書くんじゃないぞ。」と言う。
- ②あいつは、自分たちのせいで僕が自殺してもいいと思っているのかもしれない。
- ③僕がクラスでいじめられるようになったのは、一年生の二学期の初めころからだ。仲間はズレにされていた友達をかばったことが原因で、クラスの中でいつも自分勝手にふるまっているAとTとHの三人組から「無視する」という仕返しを受けた。が、僕は平気だった。ところが二年生になっても、またこの三人と同じ組になり、無視のやり方はエスカレートしていった。それでも僕は自分ではそんなに弱い人間じゃないと思っていたので、三人の無視に耐えていける自信があった。
- ④そんな僕の態度が気に入らなかったのか、三人は無視の輪を周囲に広げ始めた。初めは彼らの親しい仲間に、そしてだんだんとクラス全体に、その輪は広がり始めていった。最初のうちは「そういうことはよくない」と感じていたクラスメートも、僕が強い態度をとることに反発し、「あいつは生意気だ」といって無視するようになった。
- ⑤夏休みが終わって二学期に入ったころには、クラスの中で僕を無視することが、当然のことのようになっていた。僕が真剣に悩み始めたのはこのころからだ。一年のときかばってあげたS君までがいじめの側にたっている。少年野球のチームメートだったY君やK君までもが僕を無視する輪に入っている。あこがれていたMさんも、ほかの女子と一緒に僕を避けている。
- ⑥僕が、なにより切なく感じるのは、自分の仲間だと思っていた友達からこういう態度をとられることだ。鬼ごっこで鬼の役が僕に決められているようなものだ。しかも、決して交替のない鬼だ。みんなは、僕が鬼をやっている、自分が鬼になることはないという安心感があるから、この状態を否定しない。それに、そんなに悪いことをしているという意識もないようだ。でも、心に受けるダメージが、肉体の痛みよりも深く、消えないということは、こういう仕打ちを受けた者にしか分からない。
- ⑦このいじめに対処するために、僕は学校でわざとニコニコしていた。弱いところを見せては自分がみじめだと思ったからだ。この態度が、クラスメートには「なにも気にしていない」と映ったのだろう。結局、そういう対抗の仕方が自分をいっそう苦しい立場に追い込んでしまったのかもしれない。
- ⑧二学期の期末テストが終わったところから「いじめ」は「無視」だけでは済まなくなってきた。三人組は「ああしろこうしろ」といろいろなことを僕に命令するようになった。断ると体育館の裏へ連れていかれ、みぞおちにパンチを食らわされたり、髪をいやというほど引っ張りこずきまわされる。
- ⑨とうとう暴力がはじまったのだ。無視の輪に入っていたクラスメートは、いじめのパターンが変化してきたことに戸惑いを感じているようだったが、あいつらに振り回される僕を見て見ぬふりをしてい



- る。みんな、かかわりたくないのだ。
- ⑩暴力をふるうようになってから三人は大胆になってきた。お金の要求が始まったのだ。とうとう来るものが来たな、という感じだった。冬休みには何度も「金を持ってこい」と呼び出された。あいつらのやり方は、だんだん僕にとって残酷な内容になっていく。
- ⑪僕はこのことを、先生や両親に相談する気にはなれない。これは自分のプライドの問題だ。先生がこの問題に関係してきても、事態が好転するとは思えない。両親にはこんなみじめなことで甘えたくないし、心配もかけたくない。
- ⑫馬鹿なことだ、と思っていた同年配の中学生のニュースが、急に身近な問題として僕の心をゆさぶるようになった。「死ぬこと」が問題の解決になるわけがないと考えていた自分だが、最近「自殺」しかこの苦しみから抜け出す道がないような気がしてならない。
- ⑬「遺書に俺の名前を出すな」と言ったAの言葉を思い出す。あの三人の名前を遺書に書いてやろうと考えることもある。それしか対抗する手段がないような気がするのだ。そうすれば、彼らも考え直してくれるに違いない。しかし、その時には僕は、いない。
- ⑭なにも知らないでいる両親や妹は僕が死んだらどうなるのだろうか。僕の背丈が自分たちを追い越すことを楽しみにしている父と母は、いったいどれだけ落ち込み悲しむだろうか。このことが、僕の「死のう」という決心を鈍らせる。
- ⑮「自殺」という語を辞書で調べてみた。「自分で自分の命を絶つこと」と書いてある。きっと勇気のいることだと思う。「その勇気があるなら、なんでいじめに立ち向かわなかったんだ」と、僕が死んだ後、そう言う人がきつといる。立ち向かっていったって、僕には味方がいない。もっともみじめなことになるに決まっている。味方がいないから、息がでないくらいみじめで切なくて、死にたいと思うのだ。
- ⑯今の僕は孤独だ。孤独が僕を底無しの不安へと駆り立てる。だが、死んだからといって孤独が癒されるわけではない。死んで何の意味があるのか。僕がこの世から消えても、何の問題も解決されないはずだ。
- ⑰どうすればいいかわからないまま、また朝がやってくる。そして、あのつらい一日がはじまる。

\*①～⑰は、稿者が記入。

本資料は、いじめの拡大のプロセスが明確で、初期段階では三名の同級生だけがいじめの加害者であり、形態も「無視」という非常によく見られる状況が書かれている。中期になるといじめが周囲に広がり、主人公が助けることでいじめの切っ掛けとなったクラスメートや幼なじみ、憧れていた女子生徒からも「無視」されるようになる。最終段階では、三名の同級生から暴行・恐喝を受けるようになり、周囲もいじめの質が変わったことに気付きながらもそれを止めない状況に発展している。いじめを受ける主人公の気持ちの移り変わりや考えがわかりやすく書かれており、学習指導案を考えるのに適した教材である。

授業では、30分の時間を取り、学生に学習指導案を作成させた。その後、六人グループをつくり、各自の書いた学習指導案を発表させた。そして、五組のグループを任意に選び、代表に全体へ向け発表をさせ、稿者がコメントをした。

回収した学習指導案を分析すると、導入では、三種類のパターンが見られた。

第一のパターンは、「いじめを体験したことがありますか?」、「いじめを見たことがありますか?」などに代表される、いじめをテーマにした授業への直接的な導入である。

第二のパターンは、「いじめのニュースを知っていますか?」、「いじめの新聞記事をプリントにして配付して感想を聞く。」、「先生のいじめに関する体験談を話す。」などに代表される、

いじめの間接体験を基にした導入である。

第三のパターンは、『『ひとりぼっち』という言葉聞いてどのようなイメージを持ちますか?』、『『孤独』と感じる時はどのような状態ですか?』、『『幸せな時はどのような状態ですか?』逆不幸せな時はどのような状態ですか?』などに代表される、いじめを直接的に扱わず、生徒を緊張させないで、自由に発言をさせる導入である。

実際の授業で比較的多く見られるのは、第三のパターンである。いじめ問題を扱う場合、導入段階で直接的な題材を提示すると、生徒の側が寡黙になり、発言が活発にならず、単純に「いじめはよくない」という紋切り型の思考に終始してしまうおそれがある。導入においては、生徒の興味・関心を高め、自由に発言できる状況を作り出す必要が求められる。しかし、現実の授業では、学級の様子や雰囲気、生徒の状況により、どの導入が一番良いかは担任の判断に任せられる。

展開に関しては、二種類のパターンが見られた。

第一のパターンは、本文の内容の時系列に従い、資料を読み取っていくことが中心となる展開である。資料中の形式段落の③について、「一年生の二学期初め頃から二年生の最初に掛けて、三人から無視されていた時の主人公の気持ちはどのようでしたか?」と尋ねたり、④～⑦について、「無視がクラスに拡大し、幼なじみや憧れていた女子からも無視されるようになった時の主人公の気持ちはどのようでしたか?」という発問を書いていた、⑧～⑩について、「暴力や金銭強要にまでなったいじめに対して、主人公の気持ちはどのようでしたか?」と問うたり、⑪～⑰について、「今、主人公はどのようなことを考えているのでしょうか?」と主人公の気持ちを読み取らせる展開である。

第二のパターンは、第一のパターン同様に、本文の概要を読み取らせていくことに加え、それぞれの場面において、「あなたが主人公であつたら、どのように考えますか?」、「どのように行動しますか?」、「どのように発言しますか?」と、主人公の言動を自分自身のこととして共感的に捉えさせたり、「あなたが三人組であつたらどのようなことを考えますか?」、「あなたが、幼なじみであつたらどのように行動しますか?」、「あなたがクラスメートであつたらどのようなことを思いますか?」と、自分を登場人物に置き換えて考えを深めさせる活動を取り入れている展開である。

さらに、一人で考えるのではなく、自分が考えたことをペアになって話し合い思考を深める活動や、グループになって発表し合い、より多くの考えに触れる機会を設けたり、発言で終わるのではなく、ワークシートに書き込んだりメモを取る活動を取り入れ、文字化することでより充実した展開になるように工夫された学習指導案も見られた。

終末では、三種類のパターンが見られた。

第一のパターンは、先生が、授業のまとめを行い、自分自身の体験談を話した後、「いじめはよくないことはみんな知っているが、行動を起こすことが一番大切で、いじめられたり、いじめを見たら、そのことを直ぐに先生や家族に言ってください。」などに代表される、「講話型」である。

第二のパターンは、「今日の授業を受けて、感想を書いてください。」「考えたことや思ったことを発表してください。」などに代表される、「感想型」である。このパターンには、個人で考えさせるだけでなく、ペアやグループになって感想を述べ合い、発表させるケースが見られた。

第三のパターンは、「いじめはどのようにしたらなくなるか、考えて発表してください。」「いじめのない学校・学級にするためにできることは何ですか。」などに代表される、「提案型」である。このパターンにも、上記と同様に自分の意見を書いて、ペアやグループで話し合わせ、発表させるケースが目立った。

## (2) 学生の書いた学習指導案

本時の授業では、前時の授業に比較し、学生が具体的に学習指導案を考えていったことにより、より切実に積極的な生徒指導の在り方からいじめ問題を考察したことがわかる。

次に示す学習指導案は、複数の学生が作成した学習指導案を組み合わせ、稿者が加筆・修正したものである。

①	主題名	差別や偏見	
②	ねらい	「いじめ」のない学校・学級の実現に努める態度を育てる。	
③	資料名	「ひとりぼっち」	
④	授業の展開例		
	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点
	○「ひとりぼっち」のイメージを考える。	○「ひとりぼっち」という語を聞いて、どのようなイメージを持ちますか。 ・さみしい　・孤独　・つらい　・哀しい　・みじめ ・気力が湧かない	○自由に発言させる。
	○「いじめ」について考える。	○「いじめ」という語を聞いて、どのようなことを思い浮かべますか。 ・みんなに無視される　・強い人が弱い人に対して嫌なことをする　・いじめを見て見ぬふりをする人がいる	○深刻にならないようにする。
	○いじめが起きる原因について考える。	○いじめが起きるのは何が原因でしょうか。 ・いじめをする側に不満があり、ストレスを発散するために起きる　・大きないじめになる前に止める人がいない　・先生が生徒をよく見ていないために起きる	○過去の体験を振り返らせる。

導入	○ニュースのいじめ報道について考える。	○最近、ニュースで「いじめ」による自殺の問題が報道されているが、どのように思いますか。 ・自分も耐えることができないのではないか ・自殺する前に周囲の人に相談できなかったのか ・自殺した生徒の家族はやりきれない	○ニュースの概要を補助説明する。
展開	○「ひとりぼっち」を読む。  ○いじめ初期の主人公の気持ちを考える。  ○自分に当てはめて考える。  ○いじめる側の思いを考える。  ○主人公の気持ちを考える。  ○見て見ぬふりをする側の思いを考える。  ○いじめが激しくなった時の主人公の気持ちを考える。  ○自分に当てはめて考える。  ○より良い解決策を考える。	○主人公の気持ちに同化しながら、情景を思い浮かべ、主人公の辛い気持ちを表す語に線を引きながら読んでください。  ○いじめを受けたばかりの頃の主人公は、いじめに対してどのように思っていましたか。 ・いじめなんて平気 ・自分はそんなに弱い人間ではない ・三人の無視に耐えていける ●自分が主人公なら同じ状態の時、どのように思いますか。 ・主人公と同じことを考えてやり過ごす ・辛くなって耐えられない ・先生が家族に言う ●自分がいじめる側の三人組の立場だとして、なぜいじめをしようと思いますか。 ・主人公の態度が気に入らない ・面白いから ・自分の不満を解消・発散できないから ○周囲から無視されて、誰にも相談できないでいる主人公の気持ちはどのような感じだったのでしょうか。 ・苦しい ・本当は助けて欲しい ・気付いて欲しい ・どうせ相談しても駄目だろう ●自分がいじめを見て見ぬふりをする側の立場だとして、なぜそのようにするのでしょうか。 ・自分がいじめの対象になりたくない ・助きたい気持ちはあるが勇気が湧かない ○いじめがエスカレートして、誰にも相談できないでいる主人公はどのような気持ちでしたか。 ・自分のプライドの問題だから先生や両親に相談する気になれない ・こんなみじめなことで両親に甘えたくない ・自殺しかこの苦しみから抜け出せないかもしれない ・孤独な気持ち ●あなたが主人公だったらこれからどのように行動しますか。 ・耐えきれなくなったら家族に言う ・先生に相談する ・卒業するまで耐える ◎この資料の場合、どのようにしたらいじめはなくなるのでしょうか。 ・主人公が誰かに相談する ・傍観者の人が先生に言う ・幼なじみが改心して先生に言う	○自分のペースで資料を熟読させる。 ○本文から正確に読み取らせる。  ○共感的に考えさせる。  ○本文から正確に読み取らせる。  ○本文から正確に読み取らせる。  ○過去の体験を振り返らせる。  ○本文から正確に読み取らせる。  ○共感的に考えさせる。  ○ペアトークで考えを深めさせる。
終末	○いじめのない学校・学級にするための方策を考える。	◎いじめのない学校・学級にするためにできることは何ですか。 ・見て見ぬふりをしない ・みんなが仲の良い学級にするためにお互いを理解し合い、支え合う雰囲気をつくる ・いじめが起きたら先生にすぐ話し、学級のみんなでいじめについて考える場をつくってもらう ・「いじめは人間として絶対に許されない。」という意識をみんなが持つようにする ・特別活動や、体験活動、道徳の時間などを中心に、生徒間の共感的な人間関係づくりに努める	○最初は自分で考えさせ、ペアトークを行い、最後はグループで意見をまとめ、発表させる。

本指導案では、導入において、前項で指摘した、第二と第三のパターンを組み合わせた。すなわち、『ひとりぼっち』や『いじめ』という語を聞いて、どのようなイメージを持ちますか。」と尋ねた後、「いじめが起きるのは何が原因でしょうか。」と問い、「最近、ニュースで「いじめ」による自殺の問題が報道されているが、どのように思いますか。」と、生徒が興味や関心を高め、自由に発言ができるように構成した。

展開では、前項で指摘した、第二のパターンで構成し、ストーリーを追うだけでなく、「自分が主人公なら同じ状態の時、どのように思いますか。」「あなたが主人公だったらこれからどのように行動しますか。」と問い、主人公の言動を共感的に考えさせたり、「自分がいじめを見て見ぬふりをする側の立場だとして、なぜそのようにするのでしょうか。」と、いじめでよく見られる観衆の立場に置かれる時の思いを問うことによって、よりいじめの深刻さを考えさせるように構成した。ペアで話し合う活動も取り入れた。

終末では、「いじめのない学校・学級にするためにできることは何ですか。」と発問し、日常の生活を見直させ、日頃の心の耕しや人間関係づくりを考えさせるように構成した。最初は自分で考えさせ、ペアトークを行い、最後はグループで意見をまとめ、発表させる活動も取り入れた。

## V お わ り に

本稿では、積極的な生徒指導の在り方について、大学における授業でどのように学生に指導をしていけばよいかを、稿者が担当する授業の「生徒指導の研究」の講義で、道德教育と関連させた事例を取り上げ、論考を深めた。

生徒指導には、大きく分けて消極的な生徒指導と積極的な生徒指導の二種類がある。

消極的な生徒指導は、治療的生徒指導とも呼ばれ、学校生活の中で、様々な原因で適応障害状況に陥る児童生徒を対象としている。いじめや不登校、薬物依存、校内暴力、窃盗・万引きなどの適応障害状況が長期間続くことは、児童生徒の学力形成のみならず、社会性の発達や人格形成に悪い影響を及ぼす。このような児童生徒を早期に発見し、根本となる原因を綿密に分析し、問題解決に至る指導が必要となってくる。

他方、積極的な生徒指導は、日常の学校生活において児童生徒と共感的な人間関係を確立し、全ての児童生徒が快適な学校生活が過ごせるよう、ルールを守らせたり、校内暴力や反社会的行動を防止するという指導や、児童生徒が個性の伸長を図り、自己指導能力を育成する指導である。

授業の第一回目で、学生に生徒指導のイメージを聞いたところ、消極的生徒指導のマイナス

のイメージしか回答が得られなかった。そのため、授業における学生への指導において、積極的な生徒指導の在り方を講義した訳だが、いじめをテーマに取り上げた第12回の授業においても、日常的な取り組みの重要性を十分に認識させていないことが明らかになった。そこで、第13回の授業において、道德の時間の学習指導案を書かせることで、積極的な生徒指導の在り方を考察させた。その結果、多くの学生が、日頃の心の耕しの大切さを考えさせる学習指導案を書き、積極的な生徒指導の重要性を認識させることができた。

今後、さらに積極的な生徒指導の在り方を考えさせる授業指導について考察を深めていきたい。

### 【注】

- (1) 高橋超（平成12年）：『生徒指導観に対する現職教師及び教員養成大学学生の意識』平成12年度広島大学教育学部附属教育実践総合センター生徒指導研修会資料に詳しい。
- (2) 例えば、広島県教育委員会ホームページ「ホットライン教育ひろしま」の「豊かな心を育てる道德教育コーナー」に掲載されてある「生徒指導充実のための道德教育実践事例集」等がある。  
(<http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/12doutoku/>)

### 【引 用 文 献】

- 1) 文部科学省（平成22年）：『生徒指導提要』教育図書，p. 1
- 2) 文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領』
- 3) 文部科学省（平成20年）：『中学校学習指導要領』
- 4) 文部科学省（平成21年）：『高等学校学習指導要領』
- 5) 前掲書 1)，p. 1
- 6) 前掲書 1)，pp. 11-12
- 7) 前掲書 2)
- 8) 中央教育審議会（平成20年）：『幼稚園，小学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』p. 59
- 9) 暁教育図書・道德研究会編（平成17年）：『中学生の道德 2』暁教育図書，pp. 135-137